歴史地震，第8号，1992，歴史地震研究会
pp. 117 - 128.

価値の低い地震史料（1）
『御入国以後大地震考』と『時雨廼袖』の「琴台書簡」

建設省建築研究所国際地震工学部* 石 橋 克 彦

Japanese Historical Earthquake Documents of Little Value (1)
"Gonyukoku-igo Daijishin Ko" and "Shigure-no-sode"

Katsuhiko ISHIBASHI
International Institute of Seismology and Earthquake Engineering
1 Tatehara, Tsukuba, 305 Japan

1．はじめに

江戸時代の首都圏の歴史地震を調べていて，『新収日本地震史料（第二，三巻）』［東京大学地震研究所（1982，1983）］（以後『新収』と略）所収の『御入国以後大地震考（ごにゅうこくいごだいじしんこう）』という史料が気になった．首をかしげるような地震記事が目につくのだが，『新収』巻末の「出典」によると岡山大学付属図書館所蔵の「池田家文庫」（備前岡山藩主池田家から引き継いだ膨大な藩政史料・典籍群）のものということで，一見もっともらしいからである．

一方，筆者は，『新収』が刊行される以前に，震央が小田原沖でM7とされている慶安元年4月22日（1648年6月13日）の地震を再検討して，小田原・江戸の被害を記載している『時雨廼袖（しぐれのそで）』の記事（後述の理由により「琴台（きんだい）書簡」と仮称）が，この地震については史料価値が低いことを論じたが［石橋（1978）］，その後，問題の『御入国以後大地震考』がこの地震に関して「琴台書簡」とほとんど同じ記事を掲げていることに気がついた．そこで，東京大学地震研究所の上田和枝氏にお願いして『御入国以後大地震考』の原本コピーを見せていただいたところ，全体が「琴台書簡」および『時雨廼袖』の他の部分とよく似ており，『時雨廼袖』を抄書したものであると判断された．

本報では，「琴台書簡」の信頼性が低いことをあらためて述べ，これを引き写した『御入国以後大地震考』もまた史料価値が低いことを示す．

2．『時雨廼袖』と「琴台書簡」

『時雨廼袖』というのは，幕末期に江戸近郊の亀戸村（現在の江東区亀戸3丁目）に住んでいた医家・文人の畑銀鶏（はた／ぎんけい；1790－1870）が，安政2年10月2日（1855年11月11日）の江戸地震に遭遇し，震災の実情の見聞や古今東西の

* 〒305 茨城県つくば市立原1

地震にまつわる話を詳しく書いた書物である(1755年リスボン地震のこともみえる).正編5巻・後編5巻・続編5巻の15冊からなり，初めは出版するつもりだったが他書が刊行されたために中止し，筆写で世に広まったといわれる（序文は安政2年暮～4年秋）．『國書總目録』（岩波書店）によると写本が国会図書館と筑波大学図書館（拾遺共20冊）にあるが，江戸叢書刊行會（1917）が活字翻刻しており，石橋（1978）はそれによって議論した．

『増訂大日本地震史料（第一巻）』［武者（1941）］（以後『増訂』と略）に“〔時雨廼袖〕○畑銀鶏著”として収録されている記事は，前節で「琴台書簡」と仮称した本書のごく一部分からの引用である（収録もれも多い）．それは，『時雨廼袖』の後編巻の五にあり，銀鶏が東條琴台（とうじょう／きんだい）から受け取った手紙をそのまま掲載したものである．東條琴台（名は信耕または耕；1795－1878）は江戸末期～明治初期の漢学者・著述家で，江戸で活動していたが，著書が幕府の忌諱に触れて，嘉永4年（1851）から明治元年（1868）までは越後高田（現在の新潟県上越市）に住した．

「琴台書簡」の全文を，江戸叢書刊行會（1917）にしたがって，付の右コラムに掲げる（最初の4行は銀鶏の紹介文；1行空いているところは左コラムと対照するためで，原文は連続している）．

ここに書かれているように，「琴台書簡」の元は，琴台が誰かの質問に答えて10月17日に高田で認めた「江戸地震史」というべき文書である．文中の“御入国”とは，言うまでもなく天正18年（1590）の徳川家康の関東入国（江戸入城）を指す．この文書を誰かに写させたものを10月29日付けで高田から銀鶏のところへ送ってよこし，それを銀鶏が『時雨廼袖』後編巻の五に転載したのが，本報でいう「琴台書簡」である．琴台が銀鶏に書いているように，筆写の際に多少の誤りが生じたし，さらに活字翻刻の際の誤りや誤植もありそうだから，付の「琴台書簡」は琴台の自筆文書とは少し違うかもしれない．しかし，『増訂』が収録したのは，江戸叢書刊行會本（つまり付の文章）のようである．なお，今回は，国会図書館や筑波大学の『時雨廼袖』の写本は調べなかった．

江戸を遠く離れた越後高田で短時日の間に，265年間の江戸地震史を書いたのだから当然のことだが，「琴台書簡」には以下のように誤りが多い．

寛永4年の江戸城の被害や死者は『徳川実記（大猷院実紀）』などからみて疑問である．寛永10年1月21日の小田原地震は日付が違っている．慶安元年（正しくは4月22日）の小田原と江戸の大被害は，より信頼性の高い史料から否定される（石橋，1978）．慶安3年（正しくは3月24日）の死者は，他の史料からみてきわめて疑わしい．一方，正保4年5月14日の江戸被害地震が抜けている．この時期江戸や小田原では大・小の被害地震が多かったのだが，琴台はそれらを混同しているようである．また，明和8年（1771）や天明3年（1783）の無被害地震を書いていながら，より近い過去の文化9年（1812）の大地震（横浜・川崎方面でかなりの被害，江戸でも小被害）を漏らしている．

結局，書かれた状況から考えても，内容からみても，「琴台書簡」は文人の随筆の域を出ず，地震学的な歴史地震研究にとっては史料価値がないと言ってよい．なお，言うまでもないが，安政江戸地震や当時の地震観などに関する『時雨廼袖』の膨大な記述は、十分に史料価値が高い．

3．『御入国以後大地震考』と「琴台書簡」・『時雨廼袖』の比較

付に，『御入国以後大地震考』の全文（各頁の左コラム）と，「琴台書簡」の全文および『時雨廼袖』後編巻の一の抜粋（各頁の右コラム）を，対照して掲げる．

『御入国以後大地震考』は，東京大学地震研究所所蔵の原本コピーと読み下し原稿をコピーさせていただき，今回あらためて活字化した．したがって『新収』と違うところがあるが，それについては注記した．なお，“等”・“迄”や，一部の変体仮名・記号は，ワープロの都合で現行の文字とした．また，原文には空行はないが，右コラムと対照するために大幅にずらした．

一読して明らかなように，『御入国以後大地震考』の4分の3程度を占める江戸地震史の部分（“近年梓行の江武年表も遺漏多し”まで）は「琴台書簡」とほとんど同じである．また，残りの4分の1程度の「地震論」とでも言うべき部分は，順序が多少入れ替わっているが，『時雨廼袖』後編巻の一からの抜粋のようにみえる．

これらのことから，『御入国以後大地震考』は，『時雨廼袖』後編（またはその草稿）から抜き書きしたものと判断して間違いないだろう．「地震論」に関しては『時雨廼袖』の内容のほうが詳しくて論理的だから，そちらが元であることはほぼ確実と考えられる．『御入国以後大地震考』の最後の“輯”という言葉も，“何かから集めて取りまとめた”という意味合いで，オリジナルではないことを“天道人”自らが示していると思われる．なお，『御入国以後大地震考』の原本が「池田家文庫」のどの部分にどういう形で蔵されていたのか，“天道人”がいかなる人物か，などを本来調べるべきだが，そこまではやっていない．

一つ問題なのは，『御入国以後大地震考』の最後に“卯十月”と書かれていることである．“卯”とは安政2年だと思われるが（12年後の慶応3年（1867）ということはまずないだろう），琴台の手紙が銀鶏のもとに届いたのは11月以降のはずだし，『時雨廼袖』後編の序は安政三年丙辰四月と同二月だから，それらを尋常に写したとしたら10月ということはありえない．かなりの情報化社会だった江戸の文人の間でのいろいろな情報の流れ方も推測できるが（琴台から直接写しが行くこともありうる），“天道人”が原典の立場にたって“卯十月”と書いたのかもしれない．いずれにしても，この見かけの矛盾によって『御入国以後大地震考』の「琴台書簡」・『時雨廼袖』起源説が否定されることはないだろう．

4．結　論

『増訂』に“〔時雨廼袖〕○畑銀鶏著”として収録されている「琴台書簡」は，地震学的歴史地震研究にとっては史料価値がきわめて低い．

『新収』に収録された『御入国以後大地震考』の地震記事は，「琴台書簡」を写したものと判断されるので，さらに史料価値が低い．

『新編日本被害地震総覧』［宇佐美（1987）］には，主として『御入国以後大地震考』か「琴台書簡」にもとづいてまとめられている地震がいくつかあるが，以下のように見直す必要がある．

1627年3月8日（寛永4年1月21日）の地震で“御曲輪大破．ところどころにて人多く死す．詳細不明”とされているが，前述のように被害は疑わしい．

1648年6月13日（慶安元年4月22日）の地震は，石橋（1978）が論じたように，小田原沖・M7という震央と規模を修正すべきである．

1673年7月13日（延宝元年5月29日）の“江戸；天水桶の水こぼれ，怪我人多数”という地震は，「琴台書簡」だけによっているが，寛文11年5月30日の強震の年号を誤ったものだから削除すべきである．

1783年3月5日（天明3年2月3日）の地震の“江戸；天水桶の水溢れ，増上寺御霊屋向大破すという”という被害記事は『御入国以後大地震考』だけによっているが，元の「琴台書簡」ですら“御霊屋向震動強”としか書いていないから，被害は疑問である．他の史料には被害記事はない．

最後に，『御入国以後大地震考』の貴重な原本コピーと読み下し原稿を使わせてくださった宇佐美龍夫先生と上田和枝氏に感謝いたします．

文　献

江戸叢書刊行會（編輯・発行），1917，時雨廼袖（畑銀鶏著），江戸叢書巻の十，1-306.

石橋克彦，1978，1703年元禄関東地震に先行した関東地方の被害地震ノート　1．慶安元年4月22日（1648年6月13日）の強震，地震ii，31，342-345.

武者金吉（編），1941，増訂大日本地震史料，第一巻（945 pp.），文部省震災予防評議会（復刻版，1975，鳴鳳社）．

東京大学地震研究所（編），1982，1983，新収日本地震史料，第二巻（575 pp.），第三巻（961 pp.），（社）日本電気協会．

宇佐美龍夫，1987，新編日本被害地震総覧，東京大学出版会，435 pp.

（1993年2月15日）

次ページに，
付．『御入国以後大地震考』と『時雨廼袖』・「琴台書簡」の対照
が続く．

付．『御入国以後大地震考』と『時雨廼袖』・「琴台書簡」の対照

いずれも，割り注は＜ ＞で，石橋の注は【 】で示す．左右を対照しやすくするために，行間を適宜あけた．

『御入國以後大地震考』全文

御入國以後大地震考

寛永四年丁夘正月廿一日江戸大地震御曲輪内大破諸所ニて人多く死す八月に至て関東諸国洪水其上少々ツ、時々地震

同十年癸酉正月二日寅の下刻江戸大地震相州小田原領殊につよく人多く死す

慶安元年戊子四月廿三日関東の諸国大地震相州小田原城崩れ小田原領所々潰れ家多く右の響にて江戸武家屋敷町屋とも家根瓦落る土蔵練屏半分通り碎倒る

同二年己丑【『新収』に“己巳”とあるのは誤り】六月廿日江戸大地震武家屋敷并民家共震倒す死傷甚多し

同三年庚寅三月廿三日夜関東筋大地震同時山岳鳴動し火の見櫓数多所傾覆し死亡頗多く農家にてハ牛馬も多く死す

寛文十一年辛亥五月晦日江戸大地震此時さして死亡の者ハなし怪我人数多有之水溜桶の水ゆれ溢れこぼる常盤橋呉服橋日本橋ゆるき破損是よりして御老中若年寄諸役人天水桶の水こぼるれは登　城伺御機嫌様極ると申傳候

「琴台書簡」（『時雨廼袖』後編巻の五より）

△琴臺東條先生より送り來る地震考談の書付、既に前編に出す所と大同小異なれども、又翁の考も見ゆれば取敢ず、其儘記し出す、其文左の如し、

御入國の以後地震と唱へ申傳候分、左之如に御座候、尤少々之分記し不申候、

○寛永四年丁卯正月廿一日江戸大地震、御曲輪内大破、所々にて人多く死す、八月に至りて關東之諸國洪水、其上少しづゝ時々地震、

同十年癸酉年正月二日寅下刻、江戸大地震にて相州小田原領殊に強く人多く死す、

○慶安元年戊子四月廿三日、關東之諸國大地震、相州小田原の城崩れ、小田原領所々潰る家多、右の響にて同日同刻江戸武家屋敷町家共屋根瓦落て土藏練屏半分通碎け倒る、

○同二年己丑六月廿日江戸大地震、武家屋敷并民家共震ひ倒す死傷甚し、

○同三年庚寅三月廿三日夜關東筋大地震、江戸同時山岳鳴動し、火の見數ケ所傾覆し死亡頗多し、農家にては牛馬多く死す、

○寛文十三【干支や改元からみて十一の誤り】年辛亥五月晦日江戸大地震、此時さして死亡の者はなし、怪我人數多あり、天水桶の水動溢れてこぼる、常盤橋、呉服橋、日本橋等ゆるく、是よりして大老中大留守居老中若年寄諸役人、天水桶の水こぼれ候て、出仕御

瀬名源五郎貞雄へ屋代太郎弘賢が質問の答に天水桶の水こぼるれは伺御機嫌候と申事御日記にハ見へ不申由左候得は信用相成がたし

機嫌相伺可申様にと極ると申傳へり、
〇案ずるに<琴臺先生>大老中大留守居は、當時は缺役に御座候、此時大老は井伊掃部頭、大留守居は酒井雅樂頭なり、瀬石源五郎眞雄が屋代太郎弘賢より質問の答に見えたり、天水桶の水こぼれ惣出仕にて御機嫌相伺事は、御日記には見え不申由述たり、左候へば此事は信用に相成不申候、

元禄十六年癸未十一月廿三日関八州東海道大地震殊に江戸甚敷　御城御堀石垣を崩し土手上の並木松倒れ武家町屋共潰れ家夥し死亡四千三百余人

〇元祿十六年癸未十一月廿三日關八州東海道大地震、殊に江戸甚敷、城溝の石垣を崩して、土手上の松並樹倒る、武家町家共潰家夥敷、死亡四千三百餘人有之由、

案るに神田川堀割り牛込市ケ谷迄にいたるハ寛文年中松平陸奥守一手にて堀割る其土手に松の木を植付しが頗る繁茂せしを此時皆震倒し枯れぬ柳ハ生長繁茂しやすとて植しが今の柳原なり

〇案ずるに<琴臺先生>神田川堀立牛込市ケ谷に至るは、寛文年中仙臺侯松平陸奥守綱宗　官命に依て一手にて堀割す、其時松樹を植付頗繁茂せしが、此地震にて皆震ひたふし枯ぬ、其後繁茂生長早しとて、柳を植られ今に至る、當時の筋違御門より淺草御門迄を柳原と呼ぶは是よりして也、

寶永三年丙戌九月十五日夜亥の刻江戸大地震にて武家屋敷町屋在々とも崩れ傾く死傷も多く山の手邊殊につよし

寶永三年丙戌九月十五日夜亥の刻江戸地震にて、武家屋敷町家諸々共崩れ傾き死傷多し、山の手邊は殊に強し、

同四年丁亥十月四日未の刻東海道筋大地震大地破烈し火起民家焼失す海邊ハ洪波湧立て屋舍を漂没し怪我人多く死亡其数をしらす牛馬鶏犬も多く死す此響にて江戸海邊も大に碎崩る　御城内よりハ市街つよし十一月廿三日駿州不二山すばしり口の方より焼出し其音大雷のごとし関東近国大地震にて灰砂をふらし暗夜に均し白晝灯燈にて往來す廿五日再ひ大地震して暝々として咫尺わかたす衆人恐怖の思ひをなす廿八日に至て漸常に

〇同四年丁亥十月四日未の刻、東海道筋大地震にて大地破裂し火起、民家焼失す、海邊は洪波湧立て屋舍を漂没し、怪我人多く死亡其數不知、牛馬鶏犬も盡く死す、此響きにて江戸も海邊は大に碎崩る、城中より街市は強く動く十一月廿三日駿州富士山の麓素走り口の方より燒出し、其音大雷の如く關東近國大地震にて灰砂を吹降し、暗き事夜にひとし、晝夜提燈を用ひて往來す、廿五日再ひ大地震して暝々として咫尺を知らす、衆人大に恐怖の思ひをなす、

復しぬ

案るに元禄宝永の地震ハ諸の記録多し中にも新井筑後守が折焚柴の記室新助が文集中に詳也

廿八日に至りて漸常に復し早、
〇案ずるに、<琴臺先生>寶永中兩度の地震は、諸家の記録多し、中にも新井白石が折たく柴の記、伸書、又室鳩巣の小説文集中に詳なり、

明和八年辛卯五月二日江戸大地震六月二日又地震す此時ハさしての事ハなけれども衆人安堵せす武家町屋とも荷物をからげなどして逃仕度せしとぞ相州甲州駿州殊に大地震

〇明和八年辛卯五月二日江戸大地震、六月二日又地震、此時は指たることは無之候へ共、震ひありて衆人安堵せず、武家町方等に荷をからげ、火事の類焼を待が如く、相州、甲州、駿州殊に大地震す、

天明二年壬寅七月十四日夜丑の刻江戸大地震又十五日夜戌の刻大地震十六日の朝迄十六度震動して山岳鳴吼の聲海嘯に均く相州小田原殊ニつよく箱根山往来三日留る小田原城くづれ大破す伊豆駿河遠江三河一圓に地震し武藏下総常陸上野も同時の地震

〇天明二年壬寅七月十四日夜丑の刻江戸大地震、又十五日夜戌の刻大地震す、十六日迄十六度震動し、山岳鳴吼の聲海嘯に均し、相州小田原殊に強く、箱根山往來三日留る、小田原城崩れ、大破は伊豆、駿河、遠江、三河、一圓に地震す、武藏、常陸、上野も同時に地震す、

同八年癸卯【癸卯は天明三年】二月二日の夜丑の刻江戸大地震此時大破ハなけれ共天水桶の水溢れ増上寺　御靈屋向大破ニ付翌三日溜詰御老中方若年寄衆芙蓉間御役人登　城　御機嫌相伺

〇同八年癸卯【癸卯は天明三年】二月二日今夜丑之刻、江戸地震、此時大破はなけれども天水桶の水溢れて、翌三日増上寺御靈屋向震動強に付、溜諸老中若年寄芙蓉の間諸役人惣出仕、御機嫌伺諸番頭其外老中に謁して退散す、

同年七月四日曉【『新収』では“曉”が抜けている】江戸大地震間もなく止む朝辰之刻より上州信州大地震山岳鳴動すること大雷のごとし砂石を降らすこと大雨に似たり六日の夜に至り殊に甚敷七日にハ白昼暗夜のごとく岩石の大サ拳のごときをとばし関東近邊国々所々熱灰をふらす信州浅間山絶頂及び上州草津等其外山々燃出し烈火散乱して夜ハ□□に耀き閃く八日の未の下刻にハ熱砂を噴出し利根川の上流へ溢れ其近郷村里民家を漂没し其外此激聲に觸て破烈頽

〇同年七月四日曉、江戸大地震、間もなく止む、朝辰の刻より上州、信州大地震、山岳鳴動すること大雷の如し、砂石を降し下す事大雨に似たり、六日の夜に至り殊に甚し、七日には白晝闇夜に均しく、岩石の大さ拳の如きを飛し、關東近國所々熱灰を降す、信州淺間山絶頂及び山州草津等其外山々燃出し烈火散亂して夜は數里に耀き閃く、八日の未の刻には熱砂をはき出し、利根川の上流へ溢れ出し、其近郷村々の民家を漂没し、其外此激聲にふれて破烈頽崩、丘陵溪谷樹木斃川田畑其數を

崩せる丘陵渓谷樹木苑園田畑其数をしらす人畜牛馬ハ勿論鳥獸魚鼈山林藪澤湖海の中に有物死亡極て夥し凡往来旅行して俄に大石の碎に當り岩石の下となり又ハ地のさけめへ落水中へ陷り死骸迄を失ふもの其数をしらす信州上州武州にて死骸の聢と遺りありてしれし分四万六千人あり実に　御入國以來の一大変なり

此時江戸は七日の夜より九日の夜に至る迄天曇り日の光を見す灰の降事雪のごとし人家の家根樹木道路皆一面に白し焔硝硫黄の気鼻を撞く場所によりて其気堪難し夫より十五六日にして止ム利根川中川隅田川の濁る事十余日同廿四日北國西国の海上大風にて運漕の大船破潰して覆溺し死亡多し此節の凶変実に地震の一事のみにあらす

元和乙卯の年武徳成て干戈始て休む今茲乙卯まで二百四十一年故に乙卯ハ海内　御一統の支干とて貴賤悦び祝することなり延寶三年乙卯亨保二十年乙卯寛政七年乙卯と今年まですべて五回然るに去ル二日の大地震は奇と謂べし

元来江戸ハ四十里余り四方平衍の地にして丘陵すくなく東ハ海岸にして両總安房にハさしたる高山なし南ハ相州箱根山西ハ駒木根高尾山北ハ上州碓井妙義榛名の諸山のミにして総て山脉なし□史に記する所高山大岳あらすしてハ地震すること少し然る所寛永四年より今年迄都て十三度なり右の内卯年のミ五度亥年二度寅年二度日ハ廿三日三度二日四度あるも又奇也

不知牛馬人畜は勿論鳥獸魚鼈の山林藪澤湖海小流にあるもの死亡極めて夥敷、山を往來旅行して俄に大石の碎に當り、岩窟の下となり、亦は地の割れへ落又は水中へ陷り死骸迄を失る者其數をしらず、信州、上州、武州にて死骸の聢と遺有て知れし者四萬六千餘人也、實に御入國以來前代未聞の一大變なり、

〇案ずるに、<琴臺先生>此時江戸は七日の夜より九日の夜に至る迄、天曇りて日の光も不見、灰のふる事雪の如し、人家の屋根樹木道路も皆一面に白し、焔硝硫黄の氣鼻を衝く、場所に依て其氣堪がたし、夫より十五六日に至て止む、利根川中川隅田川の渇る事十餘日、同廿四日北國西國の海上大風にて運漕の大船破潰して、覆溺し死する者多し、此節の凶事殊に地震の一時のみにあらず、

〇再案るに、元和乙卯の年武徳成て干才初て休む、今茲乙卯迄二百四十一ケ年、故に乙卯は海内御一統の干支とて、貴賤悦び祝する事也、延寶三年乙卯、亨保二十年乙卯、寛政七年乙卯と今年迄都て五回なり、然る處去る二日の夜の大地震は奇といふべし、元來江戸は四十四里に四方平街の地にして丘すくなく、東は海岸にして兩總安房にはさしたる高山なし、西は相州箱根山、北は上州碓氷妙義榛名の諸山のみにして總て山脈なし、前史に記す所のもの是に高山大岳あるならず、昔よりして地震する事少し、然る處寛永四年より今年迄都て十三度也、右の内卯年のみ今年迄五度也、亥年に二度、寅年に二度日は毎も廿三日が三度あり、二日が四度あるも、また奇といふべし、

世上に流傳する和漢合運圖<五冊>大成年代記<三冊>其外小冊の年代記るい和漢年契等ハ俗書にて採用にたへす近年梓行の江武年表も遺漏多し

右御尋に付不取敢申上候、當時は座右に書籍匿(トボシク)して十分に搜索仕兼候間、筆の内聢と證據に相成可申分記し申上候、世上坊間に御座候和漢合運圖<五冊あり>、大成年代記<三冊あり>其外小冊の年代記類、和漢年契等は誠に以俗書にして採用には相用不申候、記載にも疎謬不少と存候、萬一諸書に相違之義も可有之候はゞ、御削正にて御直し可然と奉存候、乍去御入國以來之江戸大地震と申傳候分、外に見聞無御座候、以上、

乙卯十月十七日燈下にて記　耕　拜

是は三四通人に頼みて寫させ申候に付、筆耕の人自己の勝手に文字を盈縮せしゆへ、行數も原本と相違申候得共、あらましは分り可申に付、一本不取敢進上申候、誤字其外謬は御直し可被下候、五ケ年己來種々拙考の品御座候まゝ、追て相廻し可申候、

十月廿九日　　耕

銀鷄大人

以下は『時雨廼袖』後編巻の一より

経世衍義□曶カ日、陽伏二于陰下一、見レ迫二于陰一、而不レ能レ升ルコト、以至二於地動一、

陽気地中に伏して陰氣におさへられ地中に激攻して動揺する也

國語の周語に伯陽父が言もかくのごとし

〇地震の説、徑世衍義、孔黽曰、陽伏二于陰下一見レ迫二于陰一、而不レ能レ舛、以至二於地震一と、如レ此陽氣地中に伏して出んとする時、陰氣に抑へられて出る事能はず、地中に激攻して動揺する也、國語の周語に、伯陽父の言なども如此、古代より皆此説をいふ、

銀鷄按ずるに、經世衍義の説如何にも麁漏にして分らず、陽伏二于陰下一、見レ迫二于陰一而不レ能レ舛、以至二地震一と計りにては解を得がたし、何故に陽氣が陰の下に伏して昇ることが出来ぬといふ譯を論ぜざるや杜撰

甚し、

天経或問に地ハもと気の渣滓聚て形質をなす元氣旋轉の中に束ヌ故に兀然として空に浮んで墜す四圍に竅有て相通す或ハ蜂の巣のごとく菌の辨のことく水火の気其中に伏す盖気噴盈して舒んと欲して舒る事あたわす人身の筋轉して脉の揺くがごとし又雷霆と理を同ふす北極下の地ハ大寒赤道下ハ偏熱ともに地震少なし砂土ハ気疏にして聚す震少なし泥土の地ハ空に氣の蔵ることなし故に震少なし温暖の地多石の地下に空穴有て熱気を吹入冷気のために摂歛極るときハ舒放して其地激搏す震ハ各所各気各動なり地下の燥気猛迫し熱火に変して出れは震停る

○天經或問に云、地は本と氣の渣滓聚まって形質をなす、元氣旋轉の中に束ぬ故に、兀然として空に浮んで墜ず、四圍に竅有て相通ず、或は峰の巣の如く、或は菌の辨の如し、水火の氣其中に伏す、盖氣噴盈して舒んと欲してのぶることを得ず、人身の筋轉じて脉動が如し、又雷霆と理を同ふす、北極の下の地は大寒赤道の下は偏熱にして共に地震少し、砂土の地は気疏にして聚らず、震少し、泥土の地は空に氣の藏むことなし、故に震少し、温暖の地多石の地は下に空穴有て熱氣吹入て冷氣の為に攝歛せられ極る時舒放して其他を激搏す、譬ば大筒石火矢などを高樓巨塔の下に發せば、其震衝を被らざることなきがごとし、然れ共大地通じて地震することなし、震は各所各氣動なりと唯一處の地のみなり、其輕重に由て色々の變有、地に新山あり、海に新島のある類ひ少なからず、震後地下の燥氣猛迫して、熱火に變じて出れば則震停るなり、

地震せんとして地に孔数々出来て細き壌を噴出し土龍の持上たるごとく又地煙立も其徴なり
井の水俄に濁りあるひハ湧も其徴也
＜天文考要＞
地震に雲の近くなると云雲にあらす気の上升雲のことく烟のごとし

○事林和書巻の三にいふ、（略）
○地震の徴、天文考要に云、震せんとする時、夜間に地に數々の孔出來て、細き壌を噴出して、田鼠坋如すと是土龍などの持上るの類ならんか、
又老農野に耕するときに、煙を生る如きを見て將に震せんとすることを知ると、又井水俄に濁り湧も亦震の徴しなり、又世にいひ傳ふは、雲の近くなるは地震の徴なりと、是雲のやうに見ゆれども、雲にはあらず、氣の上昇するにて、煙の如く、雲の如く見ゆる也、

以下も『時雨廼袖』後編巻の一より

地震和名なゐ和漢三才圖繪になへとあるハこゝろへがたしなハ魚にてゐハゆりの約也魚の尾鰭を動かすがごとく動揺する也

○（前略）、
銀鶏云、地震の和名をなゐと唱へ來ること最古く、（中略）、其後三才圖繪を見れば、地震の和名をなへと記せり、（中略）、又加茂季鷹翁の説に、なは魚のことにて、ゐはゆりの約りたるにて、なゆりといふとならんか、魚の尾鰭を動かす如く、動揺するを形容して、名目とせるか、（後略）

諺に地震ハ始めきびしく大風ハ中つよく雷ハ末甚しと実に然り大震の後小震ハ久しくやミがたし

○此地震の虫の圖は、（略）、
○京師の濤山といへる人の随筆に、（中略）、世の諺に地震は初めきびしく大風は中程強く、雷は末ほど甚しといへることをもて、（中略）、舊記をしるして大震の後に震有て止ざるためしを擧て、（後略）

上古よりの地震ハ類聚國史一百七十一巻災異の部に詳なり
三代実録皇帝紀抄本朝天文志天文考要方丈記等にもミへたり

○上古より地震の有し事、國史に見えたる限りは、類聚國史一百七十一巻、災異の部に擧て詳也、
○三代實録、（中略）、（中略）、
○皇常紀抄云、（中略）、
○天文考要に云、（中略）、
○本朝天文志に云、（中略）、

以下も『時雨廼袖』後編巻の一より

亨和三年十一月佐渡にて大地震に逢し人の咄に其日ハ四方濛々として雲山の腰にたれ央より上ハ峯顕れたり地震の徴ならんとて速時に平原地へのがれしりぞく四里程行て果して大地震也もとの地ハ山くつれ海涌て人も多く損しぬ

○廣島の某の譚に、亨和三年十一月諸用有て、佐渡の國小木といふ港に滞留せしに、同十五日の朝なりしが、同宿の船がゝりせし船頭と共に日和を見むとて、近邊なる丘へ出しに、船頭のいはく今日の天氣は誠にあやしげなり、四方濛々として雲山の腰にたれ、山の半腹より上は峯あらはれたり、雨とも見えず風になるとも覺へず、我年來斯

の如き天氣を見ずと大に怪しむ、此時廣島氏考て曰、是は雲のたるゝにあらず、地氣の上昇するならん、予幼年の時父に聞る事有、地氣の上昇するは地震の徴なりと、暫時も猶豫有べからずとて、急ぎ旅宿に歸り、主人に其由を告、此地後は山、前は海にして甚危し、又來るとも暫時外の地に赴んと、人をして荷物など先へ送らせ、そこへに支度して立出ぬ、道程四里計りも行と思ひしが、山中にて果して大地震せり、地は波のうつ如く搖りて大木など枝皆地をすり打ふしまろびながら漸々に逃れて去ぬ、此時小木の湊は山崩れ堂塔は倒れ、潮漲て舍屋咸海に入、大きなる岩海より湧出したり、夫より毎日小動して六月に漸止たりと、其後同國金山に至りし時去る地震には定めし家も潰れ人も損ぜしにやと問しに、さはなく皆いふは此地は昔より地震は已前に知りぬ、去る地震も三日以前に其徴を知て、皆家に入らず用意せし故、一人も怪我なしとなり、其徴はいかにして知るやと問しに、將に地震せんとする前は家の中地氣上昇して、傍なる人も互に腰より上は唯濛々として見えず、是ぞ地震の徴とすといへり、按ずるに、穴中に入者は地氣を能く知る、鳥は空中にありて上昇の氣をしる、今度地震せんとする時、數千の鷺一度に飛を見る、又或人七月廿七日の朝いまだ日も出ぬ先に、虹丑寅の間にたつを見る、虹は日にむかひてたつは常也、いづれもつねにあらざるは徴とやいはん、（後略）、

〇京師の産思齋主人の説に、地震に徴あること現在見し所、文政十三年寅の六月廿五日、日輪西山に沒するに其色血の如く、同七月四日月沒する其色亦同じ、（後略）、

佐渡の金山の人ハ三日も前に地震をしる穴の中地気上升して傍の人も腰より上ハミへす是徴なりとて穴へ入す故に昔より怪我なし

文政十三年京都大地震の前六月廿七日朝いまた日の出ぬ先虹丑寅の間にたつ虹ハ日にむかふものなるに是ハ虹にあらす地気の升るなりこの七月二日大地震也六月廿五日日輪西山に没す其色血のごとく同七月四日月没其色おなし

卯十月　　東台麓　天道人輯